

## 巻 頭 言

学長 東 隆眞

平成九年は、わが駒澤学園の創立七十周年にあたり、本学が開学して第五年となります。

本学の研究紀要は、開学の第一年にただちに研究紀要編集委員会を組織して原稿を募集し、編集に着手し、刊行を実現し、以後、毎年、順調に刊行を重ねて、ここに第四号をみることとなったのであります。

執筆、寄稿していただいた諸先生をはじめ、編集委員会の先生がたに、あらためて御礼を申し上げます。

さて、わが駒沢女子大学は、道元禅師の禅の精神を「正念」、「行学一如」ということばにあらわして、これを建学の精神としているのであります。

およそ、仏教、禅の立場は、いわば無立場の立場です。いわゆるイデオロギーやイズムではありません。ドグマティックなものもありません。あらゆる先入観、既成概念、固定観念を打破していくところにその本領があります。偏見や固執はもつとも忌むところであります。そういう地平から見えてくる万物のいのちの自覚というか、如実の知見というか、そういう根源的な営為であります。道元禅師の禅の精神を建学の精神としている女子大学は、地球上、世界で唯一、本学のみであります。

本学の建学の精神を基盤として、本学の研究、教育はいとなまれるのであります。いとなまなければならないのであります。

また、紀要は、本学で研究や教育にたずさわる教師の研究成果をまとめ、これを世に公示する役割をもっているのは当然であります。すが、詮ずるところ、それは、直接には本学の学生たちの研究、教育に資するものでなければならぬでしょう。

二十一世紀は、国際化、情報化、多様化がますます拡大し伸張していくといわれています。そして、女性の時代だといわれています。

このような歴史的近況を見据えながら、また百年さきの方向性を念頭におきながら、建学の精神を具現していくところに、本学が存在する理由があるのだといえましょう。私どもの世界に対する人類に対する使命と責任ははなはだ重いのであります。

それゆえ、このような意味において、本学の研究、教育の独自性と公共性、換言すれば特色が問われることになるはずであります。そして、この問題は、この紀要になんらかのかたちで反映してくるはずであります。紀要の質のレベルアップをつねにめざし、これを維持していきましょう。

そうでなければ、そもそも紀要など刊行する意味がありません。

学園創立七十周年、開学第五年、紀要第四号を機に、ひとこと申しのべる次第であります。